

# ホームズの 英國的な 変人ファッショն

中野香織

(作家、服飾史家)

シャーロック・ホームズのファッションといえばインバネスコート(Inverness Cape)／スコットランドの地名に由来／図1)に鹿撃ち帽(Deerstalker／図1・図2)というイメージです。とはいっても、コナン・ドイルが書いた小説の中にはこのアイテムの記述がないらしく、シドニー・パジェットが雑誌「ストランド」に描いたイラストの一点を見ると(図3)、「名馬シルヴァー・ブレイズ」("The Adventure of Silver Blaze")、ホームズが着ているのはスポーティーなアルスター(Ulster／アイルランドの地名に由来)というコードです。

ワトソンはボウラー・ハットにチエスター・フィールドコートですね。当時のロンドン紳士たちが好んだスタイルの一典型です。ホームズは鹿撃ち帽にフードのついたインバネスコートではなく、アルスター・コート。現代でいうと、ネクタイを締めたスーツスタイルが「常識」という環境のなかに、パーカーにニットキャップといった「場違い」な感じの人がいるというイメージでしょうか。主流の紳士スタイルではないけれど、ファッションをわかっている人(ホームズは変装の達人でした)が、あえてのオーバーニーズをはいている……。ホームズというキャラクターとファッションの関係を考えてみる。

インバネスコートに話を戻しますが、じつは日本人にもなじみのあるコートなのです。袖があるものとないもの、二種類の形があります(ホームズは袖のあるものを着ています)。日本には一八八七年ごろに入ってきたが、袖がないほうは着物を着るときに便利だということで、大正から昭和初期にかけて「薦」(「重まわし」などと呼ばれて、着物用コートとして流行しました。和洋折衷の成功例のひとつです)。

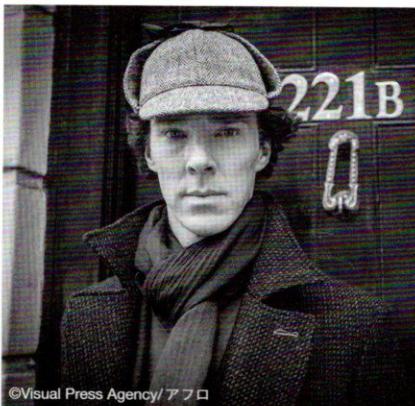


図1(右)ロンドンの地下鉄、ベイカー・ストリート駅にたたずむシャーロック・ホームズの像。鹿撃ち帽とインバネスコートをまとっている。図2(左)21世紀版とも呼ぶべき英BBCのドラマ『SHERLOCK』。シーズン3で鹿撃ち帽をかぶるホームズ。コートはボタンのかがり糸が目を引くベルスタッフのもの。



## ルールをどう破るかが重要なイギリス流

るのですね。本場のイギリス紳士にとつては、ルールをどう破るかが大事なポイントです。

どこかひねくれて、あまのじやくなのです。

ホームズのファッショングを考えることは、ホーミーズという人物について考えると同時にイギリス的なものとは何か？ を考えることにもつながります。

日本でイギリス好きを自称されているかたたちは見られる共通点のひとつは、イギリス流のダンディズムへの興味です。夏でもビシッとスリーピースというかたが多いのですが、イギリス流は靴下が赤だつたりします。「靴下は靴とトラウザーズをスマーズにつなぐように」というビジネススーツのルールをあつさりと無視す



図3 ヴィクトリア朝時代のイラストレーター、シドニー・パジェットによる挿し絵 ("The Adventure of Silver Blaze" 「名馬シルヴァー・ブレイズ」)。ホームズは鹿撃ち帽にフードつきでケープのないアルスター・コート。ワトソンはボウラー・ハットにチェスター・フィールドコート。

るようになります。スーツスタイルの法則にしても解釈をひとつに決めません。ただ、日本のイギリス好きの困ったところは法則の破りかたまで本場の真似をしてしまうところなのですが、

イギリス流の法則破りはユーモアや皮肉という形で現れるもので、これ見よがしに伝えるものではないですね。「ほらほら、私、法則を破っていますよ！ 見て見て！」ではありません。

真正面からは行かない。

イギリス的な表現が巧みな作家の代表格としてはサマセット・モーム（一八七四—一九六五年）が挙げられます。中心のテーマを迂回して書いていく。読者に読み解きの駆け引きという知的な楽しみを投げかけるのです。けつして上から教えようとしない、斜めから気づかせるという手法です。受け取る側の知性を信頼し、解釈の楽しみを残しているのですね。

インバネスコート（あるいはフードつきアルスター・コートにせよ）に鹿撃ち帽というスタイルも、受け取る側に、ホームズという人物の解釈の楽しみを与えているようなものを感じます。

解釈の楽しみが残されているのは、ファッショング以外の要素においてもです。ホームズとワトソンの関係もそうではないでしょうか。男性どうしの恋愛関係なのか、そうではないのか、読む者、見る者に解釈の余地を残しています。

コナン・ドイル（一八五九—一九三〇年）がホームズを誕生させた一九世紀末、ヴィクトリア朝の時代は同性愛はご法度でした。ドイルと同時代の作家オスカー・ワイルド（一八五四—一九〇〇年）は同性愛の罪で投獄されています。

そのような時代にドイルがどういう意図を込めてホームズとワトソンの関係を書いたのか？ ヴィクトリアニズムが頂点を極めていた当時は、リスペクタビリティ (respectability = 尊敬に値する上品さ) が重視され、性的な連想を呼びそうなものはすべてタブー視されました。ビアノの脚も布で覆われて隠されたり、脚を意味するlegはlimb (四肢) という解剖学的な用語に言い換えられたりしていました。ユーフェミズム (euphemism) と呼ばれる婉曲語法が幅を利かせた時代です。

英BBC版『SHERLOCK／シャーロック』

## 『SHERLOCK』から生まれた「ドロマンス」

が登場した二一世紀では、ホームズとワトソンの関係は、

*Friendship, almost homosexual*

と解釈され、温かく見守られています。

ドラマで本人たちは否定していますが……。

一九世紀末にはありえなかつた状況です。

『SHERLOCK』を契機に**bromance**という言葉が生まれました。brother  $\leftrightarrow$  romanceを合わせた言葉で、男性どうしの「親密だが性的ではない関係」を意味します。一九七〇年代には映画などでbuddy（相棒）ものと呼ばれるジャンルがありましたが、それはマッチョな色合いが濃いものでした。社会全体がホモセクシュアルをタブー視していたこともあるのでしょうか。

なんとの**bromance**、オックスフォード英語辞典（OED）にも収録されました。イギリス社会の現時点のLGBTへの視線の変化も反映されているのかもしれません。ハドソン夫人が「恋人でしょ？」と言いながら優しく一人を見守っている、あの状況です。

## ホームズはダークヒーロー

私が講演でホームズ作品を取り上げるときは、イギリスが得意な「ダブルスタンダード」から

生まれたヒーローだと説明します。先ほども話したヴィクトリアニズム絶頂の時代、女性は貞淑であることを強く求められていました。その一方で、当時、ロンドンの二〇～五〇代の女性の五人に一人が娼婦だったと言われています。コナン・ドイルがホームズ・シリーズの第一作『緋色の研究』を発表したのは一八八七年、翌年に切り裂きジャック事件が起きています（一八八八年、ロンドンで発生した連続殺人事件）。五人以上の娼婦が殺害された未解決事件。

ヴィクトリア朝イギリスの光と影というダブルスタンダード。その影の部分も身近にあったものでした。社会全体がホモセクシュアルをタブー視していたこともあるのでしょうか。

アメリカンロマンティックのバットマンは『ダークナイト（The Dark Knight）』という映画になりましたが、ホームズにもダークナイト的な要素があると思います。

影から生まれたヒーローだから主流のジェントルマンスタイルではなくインバネスコートに鹿撃ち帽だったのではないでしょうか。ホームズ自身がボヘミアン（的）で、紳士階級の行動規範から大幅にはずれる存在です。

しかも、変人として描かれています。ドラマ

『SHERLOCK』で、スコットランドヤードの人たちがホームズを「サイコパス」と揶揄する、「ちがう、僕はソシオパスだ、高機能ソシオパス（社会的不適合者）」だと言い返すシーンがあります。社会的不適合者、平たく言ってしまうと「変人」ということでもあるのですが、イギリス文化において変人であることは評価されるべきことでもありました。

*He is eccentric!*

「ふう表現はほめ言葉です。

black sheepという表現もあります。白い羊の群れに黒い羊が一頭いたら目立ちますよね。black sheepも「変わり者」や「厄介者」の意味で使われることが多いのですが、それが転じて「かっこいい」の意味になることがあります。ホームズはイギリス的なヒネクレやネジレをまとつたダークヒーローであり、ファッショニの影響力もわかつていたクールな黒い羊だというのが私の解釈です。

## ワトソンのジーンズは……

現代版とも言うべき『SHERLOCK』では、ホームズ、ワトソン、マイクロフト、モリアーティ、アイリーン・アドラー……といったキャ

ラクターが身に着けているアイテムのブランドを一覧できるサイトがありました（WEAR SHERLOCK! 現在閉鎖中）。

それを眺めていると、各キャラクターの本質的な個性が、現代ファッショニによって的確に表現されているなど感心したものです。

ドラマのホームズはインバネスコートではないウールのコートを着ています（図4）。ワトソンが「いつも同じだな」と評するその



図4 ドラマ『SHERLOCK』でのホームズとワトソンの描かれたからbromanceという言葉が生まれた。ワトソンはユニクロのジーンズをはいている。

©Photofest/アフロ

コートはベルスタッフのもので、オートバイのライダー用のアイテムで知られるブランドです。

冒險的スピリットと機能性を特徴とし、現代的な復活を成功させた老舗ブランドのコートは、二一世紀に蘇ったホームズにぴったり。

スーツはイギリスブランドのスペンサー・

ハートですが、シャツはイタリアのドルチエ&ガッバーナ、靴はフランスのサンローラン、と海外ブランドを着用し、コスモポリタンな雰囲気も漂わせています。

マイクロフトのスーツはロンドンで名門テラードが集まるサヴィル・ロウ、しかもその一番地に鎮座するギーブス&ホークスです。エスター・ブリッジュメントであることを表現するのに最適なスーツです。また、ワトソンは大衆的なウーリッチのセーターとユニクロのジーンズですが、その上には王室御用達のバブアーのワック・スジャケットを羽織っています。見栄をはらず堅実な、元・軍医らしい選択です。

モリアーティが現代イギリスファッショニの大御所、ヴィヴィアン・ウエストウッドのスースを着ていることは、「ヴィヴィアン・ウエストウッドのスースが汚れちゃう」というセリフからもわかります。どくろ柄のネクタイはアレキサンダー・マックイーン。どちらも権威や伝

統にたてつく美学で人気の英国ブランドです。

アイリーン・アドラーはアレキサンダー・マックイーン、ジャック・アザグリーなどイギリス高級ブランドのドレスを着ていますが、ホームズに会うときの服を

「My Battle Dress！」

と言っています。直訳すれば「戦闘服」、字幕では「勝負服」となっていました。結果、選ばれた「服」のポイントは、靴底が真紅のクリスチャン・ルブタンの靴にあることは明白だったのですが、なんと「ヴァーゲン」のホームズはそれを見ても「？？？」となっていました。こういう「かわいい」ホームズの演出は、衣装に力を入れたこのドラマならではでした。

ワトソンの妻、メアリーの「眞実」にしてもデンツの手袋が示唆していました。ファッショングから各人物の背景を読み解く楽しみが大幅に加わったことは、二一世紀版を見る大きな喜びの源でもあります。

K

なかのかおり作家・服飾史家。東京大学文学部卒業後、教養学部（イギリス科）に学士入学、卒業。東京大学大学院博士課程単位取得満期退学。ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学国際日本学部特任教授などを歴任。著書に「紳士の名品50（小学館）」「モードとエロ（新潮選書）」「ロイヤルスタイル 英国王室ファッショニスト」（6月15日発売／吉川弘文館）など。日本経済新聞、読売新聞など多媒体で連載記事を執筆。企業数社の顧問も務める。